明治三十一年一月十八日印刷
明治三十一年一月二十日發行

婦人衛生雜誌

第九拾八號

私立
大日本婦人衛生會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本婦人衛生雜誌
第九拾八號
目次

講演

●細胞の維持に就て　醫學博士　三浦守治君

●細胞に就きて（第二複稿）　醫學博士　三浦守治君

衛生叢談

●哺乳兒の消化不良と牛乳との關係

●二三の食物

●尿に就き

●漬物こしらへかた

●濕疹

●大日本婦人衛生會景況

●廣告數件

大日本婦人衛生雜誌
第九拾七號
目次

講演

●疾病の素因と誘因　醫學士　岩井禎三君

●日常の器具に就て　高橋辰五郎君

●酸素及水素の實驗　山元敬太郎君

衛生叢談

●産婦の保護

●嬰兒の保護

●胃弱者の一經驗

●精神病に就て

●あれ性の人に告ぐ

●食物素人理料法

●電撃によりて氣絶したるものを蘇生せしむる實際の方法

●按摩の事

●室内温暖法

●小兒腦水腫

●大日本婦人衛生會記事

●新潟支會記事

●廣告數件

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人衛生雜誌第九拾八號
（明治三十一年一月二十日發行）

講演

細胞の維持に就て（十月例會於帝國教育會場）

醫學博士　三浦守治君演說

私は今回何か話を致すと云ふ御約束をして置きました、併ながら別段演題を申し上げませんでありましたと云ふものは、是れと云ふ極つた事を御話することはなか〳〵出來ません、けれども私は自分が始めから益の無いつまらないと思ふ事ならば寧ろ御話は致さんが、一般の事に渡ッた多少自分が必要と認めて居ることを御話し致すのであります。けれども然し一般に渡た事でありますから、別段に題を撰ぶと云ふ事は出來ない様な、誠に漠然とした事であり升。且つ私は禮儀を一向心得ない者でありまして、言語は自ら傍若無人と云ふ様な事に至るかも知れませぬが、何卒其處は御用捨を願度い。で抑〳〵此人体と云はふか、動物或は植物即ち今一般に總稱すれば有機体と云ふ者の元は、極く細小微なる物から成立て居る。是れは即ち細胞と名けます。此事は素より人の云ふ所でありまして、別段に事新しく演べるにも及ばぬ位で御座い升、即ち人間の細かい〳〵細小肉片を細胞と云ふ、此分かれ〳〵たる細胞と云ふものが集合して、其集合体から色々のものが出來まして、それで一定の完全した身体と云ふものになります、元を質せば人間も只一つの細胞で此細胞が集合して人体と云ふものが成立て居る、之れが即ち吾〳〵

の元であッて、色々話をしたり、手を離したりする樣な事になります。此細胞の形狀と云ふ者はどうであらうか、人間の衛生と云ふ者を研究するには、先づ細胞の衛生を知るのが必用であり升、近來或生理學者は、生理は一体細小動物に就て研究したのでなければ、眞の生理と云ふ事は解らないと云ふ樣な極端論を唱ふる者も出た位であり升。それは果して然るや否や、私共には能く解らない、併し左樣な論者も出る位故、此細小肉片一個に就ての研究の素より必用なるは論を俟ちません。

此細小肉片即ち細胞といふものはどう云ふものから成立て居るか是れも皆樣が御存じの通り、通常の細胞と云ふものは一つの細胞膜、其中に實質と云ふ者がある、即ち細胞實質「プロトプラスナ」、細胞膜の「メンブラン」其中に又小さな膜がある、其膜の中の物が大層必要であるが、其れはどう云ふ作用を營むで居るか、我々には能く解りませぬ併し普通の細胞の中に就て區別を致しますると、其中の細胞質、其中にカクシヤウヒンが一つ二つある、先づ細胞の構造は是れが一般であります。又其他の例外が種々あります、又今申した膜のない細胞などもある、又人体のシヤクケツキウの如き大層必要には相違ありませんのですが、其中には見ない、小動物には其中に核と云ふものが、顯れて居るこれも皆樣のよく御存じの事であり升、それは委しき事を演べる必要はありません。それで此細胞が生活を營むには何が入用であらうか、或は又他の言葉で申ますると、細胞の生活機能と云ふのは何であらうと云ふのであり升。それ

には甲　第一に維持でありまず、或は他の言葉で申たら民力休養或は自養それで先づ細胞の生活するに必要なるは維持是を原語で「ヌットリッショム」と申します。畢竟充分に維持の出來た細胞は機動を營むで此細胞は維持と云ふ事が充分に出來て後始めて機動を營み得るのでありまず、則ち其口を動かして饒舌り、或は目を動かして見るとか、或は歩行するとか、或は手を動かすとか云ふ事はことごく細胞の機動ならざるはない。是れをば維持が出來て然る後機動を營みます。即ちこれをば「フンクチュラーム」と云ひます。借ソレばかりかと云ふに爾うでない此細胞あるものは「ボルニッション」段々增殖すると云ふ性質を有つて居る、一定の時より一定の時に至ッて、一定して後增殖するのでありまず、此維持機動增殖を總稱しまして、即細胞の生活と云ふのでありまず、維持を營まなければ機動が出來ない、元より維持機動が無くては、細胞と云ものを增殖する事が出來ない、即ち一番初めは「ヌットリッショム」が充分であれは、自ら機動を營み得る、そうすると細胞が盛に增殖する是は自然の結果で、實に解り易い事でありまず、此事は千八百五六十年の頃に、「ユルショウと云ふ人が細かく分けて研究しましたので、ユルショウの細胞病理と云ふ物が出來ました。同じ頃に、シュワン、シュライデンと云學者か、植物に就て植物の細胞を顯微鏡から見まして、此細胞は「セッルーラー」だと云ッて居ります。「セッルーラー」と云ふのは小坐敷が並んで居ると云ふ事、坐敷が一つ出來ると、ソレが維持機動を營んで增殖し、幾つも坐敷が出來て坐敷が並んで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

居る、輙ち細胞と云ふものは、細胞の壁は見えるが、内部は透明で、顕微鏡で見ても何にもない、只細胞が列んで居るばかりです、ソレで「セッルーラー」と言ッた今も監獄の囚室の列んで居るのを「セッルーラー」と謂ひます、實は此言葉は甚だをかしな言葉で、人のからだを小座しきに分けると云様な事で、今日から考かへると甚だおかしなものでありますが、此人が發明をした時言ッた言葉でありまして、今日迄依然として此言葉は改めない、やはり人間のからだは小座敷から成り立ッて居るといッても誰れもこれを聞いて少しもあやしまないので有りますするデ、先きほども申ました如く、元此人間は一箇の細胞であります、只一つの細胞から出來て居ります。こゝで一寸申上げておきますが、此細胞のおはなしをするに就ては、自然卵巣若しくは子宮壁の事にはなしが渡るかも知れませんが、病理解剖に從事して居るものは自然と此邊にはなしの渡らんと云ふ譯には參りませんから貴婦人方の前で、甚だ恐縮の至りながら此邊に御はなしが行きましたら何卒御免しを願ひます此卵巣に卵の一部分が化生しまして、これは千八百二十七年頃發明せられたので有ります、例へば人間にせよ、他の動物にせよ、段々卵より化生する者である、而して是れは千八百二十七年頃に獨逸人が發明をしましたので其名譽と云ふ者は今に至るまで獨逸人に占領せられて居りますが、其譽を申しませば初め―ガーラー―と云ふ人は、一つの者を卵巣に就て發見し、是れは人間の卵だといッた處があとで、―ゲール―なる者が、此中に在有せられて居る小なるものが眞の卵であると云ひました、此

細胞の維持に就て

卵が始めはどういふ作用を營むか、どう云ふ生活をいとなむかと云へば先づ維持で御座います。維持ばかりで遂に現世に出て來ない人の卵もいくらもある即ち人間の卵といふ者は、母胎に維持せられて、遂に此世に出ないで仕舞者も澤山あるので御座います、此卵が好機會に逹すると、夫れが増殖を始める、矢張り此卵が初めの中は維持といふことを第一にして（人間動物の卵共）次は増殖をいたします、夫から機動といふ所に至ッては極まだ少ないのであります。

偖此卵が母の胎内に在ります處の樣子を見るに、維持に増殖である、段々子供が増大致し見えますけれども、其中でなにも立派な機動を營みはしない又腹の中で機動をいとなまれた日には大變に不都合な理由であります、且其維持増殖といふのみに止ッて居るので有ります。又其中にはとりのけもあります。胎兒の心臟の作用といふものが、卵が、一定の時まで増殖して、而して形が出來ると其時から心臟なる者が機動を營むので有ります。胎兒が母の胎内に於て機動を營み得るものは心臟ばかりで有ります、心臟と其れに所屬の血管であります、心臟と血管とで衛生物を身体に給して維持せしめ、増殖せしめると云ふことになッて居ります。で此邊の處の自然の作用は實に面白い、それで、胎盤と其れから宿て居る處の部分の壁等の關係を見ますると、丁度犬牙相入る、互に食ひ入ッて居て、或部分の如きは離さうとしても少しも取る事が出來ません、是に人体の圖を畫て見ますると（黒板に畫して指示する、胎兒の手と足と腰と臍部とが、斯う云ふ風に胎盤に就て居りま

細胞の維持に就て

す。胎兒が宿ッて居る所の壁と、胎盤との間には接續が繋ッては居りません、母胎と兒体との間に直接の接續は無いが、此處で血管と血管との壁が相觸るゝ樣になッて居ります。それで此胎体の血管が兒体に何を輸入するかと云ふに、是處から輸入する所の者は食物母の腸胃を勞しまして消化をして血液中に送り遣りました滋養分を、是を子供に分養する、肺臓に於て呼吸して酸素を取た清血液を此處迄以て參りまして、それから酸素を兒体に分輸する。それから子供の身体の中で用ひ盡して入らなくなッた者は、母体の体へ送り返す樣になッて居ります。輙ち炭酸が澤山になりますると、それを又母の肺臓を勞して外へ送り出して仕舞ふ、或は母の腎臓を勞して排泄して仕舞ふとか、かう云ふ樣な事をして胎兒は母の胎内に生活をして居ります。能く考へて見れば此兒体に於ける胎盤なる者は、肺臓の作用を爲し、腸胃の作用を爲し、心臓の作用をも營なんで居ります。(以上圖に就て說示せられたるものなり)それと同樣母体の子宮壁、此壁の一部分胎盤に相當して居る所の部分と云ふものは、矢張り子供に向ッては肺臓なり、腸胃なり、又心臓となるものであります、是れがないと、瓦斯交換を營み、或は營養物の輸入が出來ない、それに依ッて生活をして居る、其れがどうして解るかと云ふに、證據とも云ふべきは、若しも胎盤に病とでもあッたならば、兒体を充分に維持する事が出來ない況や「フンクション」に於てをや、素より出來ない話である、其れ而已ならず母体に於て兒体に對する所の肺臓にならなければならんもの、或は不完全ながら腎臓の如き

作用を營まなければなりませんものが病に罹ッて居ると、どうしても此發育を充分に營む事は出來ない故、發育を營む事が出來なければ素より維持する事が出來ないと云ふのは解りきッた事でありますそこで、往々世の人の云ふ所の子宮病だとか、何とか云ふものに罹ると何故惡いかと云ふに、かう云ふ關係から胎兒の肺臟にもなれない、腸胃にもなれない、心臟の作用も出來ないから、それで胎兒が生活を營む事が出來ないのであり升幸にして、此處に宿るも若し子宮が惡いとか云ふ事があれば、胎兒の發育が出來んのは明かであります。增殖と云ふ事の時期はいつ頃迄持續する者であらうか、駸々として人間が發育してどこまで段々丈が高くなり大きくなる者であらうか、それが一つの問題であるが、今迄の實驗に依ると先づ凡そ二十四五歲あたり迄は增殖と云ふ事か烈しく、それからは主に維持と云ふ時期になります、子供は体外に出でましても、中々左樣な營みはしない、矢張維持に汲々として居る、增殖に汲々として居ります。先づ假りに身体を一つの建築物としますれば、身体と云ふ建物を充分にしてから、言ひ換れば先程申した細胞の群が悉く出來ましてからでなければ、眞實の機動を營む事は六ケ敷、それ故增殖維持此に汲々として居るのであります、それで初めの中は建設の時期、建設すると同時に建物計りでもならん譯ゆへ、建設したものに裝飾が加へて行く、それは何であらうか、それは即ち敎育であらう、しかし此胎內に置きましてから維持增殖と云ふ物が段々機動といふ事をいとなみかゝッて居りまする、是は私が別段細かに云

細胞の維持に就て

ふまでもありませんか、此中で我々に殊に注意して置かなければなりませんと云ふのは何かと云ふに、維持と云ふ點であります殊に衛生家たるものは細胞といふものに就て、細胞の維持と云ふ事が最も必要、夫れには自營の道が不充分であッては外襲に堪へない、然らば其自營の道を講ずるにはどうしたらよからう、ソレ故に食物を撰ぶの必要が起ッて來る、然しながら其食物と云ふた處で、幼時、壯時、老年の食物皆ちがいます、夫れから人間の病氣の時にもまた違ひます、又健康の時でも、其食を異にしなければならん事もあります、夫れ故、食を撰ぶの必要と云事に就ては、細胞の關係をよく考へなければならん輙ち食を撰んで良食を用ひるにはどの場合にどう用ひ、どう云ふときにはどうしたらよかろうと云ふ場合を撰ぶ必要も起ります。食物の事に就ては、是迄度々此席に於て御話も出たで有りませうが、多くの人が牛乳には蛋白質がいくら〳〵ある、又牛肉には何がいくら〳〵あるとか、食物の利害得失を大槪述べますが、併し牛乳はどういふ場合にどの位用ひたら宜しいか、是を知るのがむつかしい、牛乳はどの人にも適するかどうか、頗る疑問である是は大變に研究しなければならん一ッの問題であります「牛肉は好いさうだ是非召上がれ」と云ふのは是は人間を丁度機械的に考へた人の言、デ今申ました通り、維持が甚だ必要である、維持するには食物の必要が起ッて來る、維持が充分でないと外襲の刺戟「オイセレーライッセ」に堪へられません。是れは種々統計上に據ッて證明せられて居るのであります、監獄の多少惡るい食物を取ッて居ッたもの

細胞の維持に就て

が病氣に罹ッたのと、ソレから衛生の好い人が同じ病に罹ッたのとは、其經過は雲泥の差で有ります、細胞を充分に維持する力の有るものと無いものとでは大層な差を生じて來ます、雲泥を云と文字はかゝる場合にこそ用ゆべきで有ります、維持と云ふ事は必要のもの、是れを私は格段に申し述べ置きたい。デ衛生と云ふ事を細かに言ッて見やうなれば（少しく極端論ながら）細胞をして充分自養せしめ、而して外襲の刺戟を防ぐと云ふことになる、言ひ換ゆれば外襲の刺戟を遠けると云ふ事、ソレが所謂衛生既に病に罹ッた以上は、醫師の治療の部分に屬す（但しソレ故に病氣をおろそかにして宜いと云ふのではない）ソレで維持すると云ふのは輙ち細胞の中に、何時外襲にかゝッても自ら保ッて往くことの出來るだけの力を貯蓄する是れを我々が欲するのであります、ソレは即ち今言ふ食物の良否如何であります。併ながらソレも美食が宜いと云ふのではない、美食良食と云ふことをよく分けて知らなければならぬ、隨分伊太利あたりの或奢侈を極めた王樣が、佳肴珍味を限りなく召上がッて、胃が一杯になると、是れを咽喉の方に送り出して、又新たに食べ、吐いては食べると云ふやうに、幾度もせられたと云ふとが、醫師の歷史、又外の歷史にもある、奢侈を極めた美食と云ふのは、ソンなとでも言ふのであらうが、良食は固より人間に適當のもの、ソレ故其製法其量までを考へて造らなければ良食とはいはれませぬ、質を撰び、量を撰んで食べましたものが胃に入ッて消化し、血液の中に吸入せられて其用を爲すソレで始めて其効が顯はれて參りま

す、維持機動增殖の總てになるので御座いますから、我々は細胞の中に、外襲に對する抵抗力を貯蓄する爲めに良食を撰ばなければならないと云ふ必要が起る。デ私は細胞の生活と云ふ事に就て良食の必要ある事を述べ、併せて美食良食の區別を一言致しました。而してソレは甚だ漠然としたとで有りますが、又何年か經ちまして益々醫學が進歩しましたならば、良食美食と云ふ事に關して、細胞の生活に何う云ふ差のあると云ふ事のなほ一層委しき御話を、斯う云ふ席に於て申し述べるやうなとが有るかも知れませぬ。

●細胞に就きて（第二複稿）

醫學博士　三浦守治君

動物及植物、即ち有機体は悉く皆極めて微小なる元素より成立つ、此元素は細胞と名付けらる是等の事は人の普く識る所ろにして私が今こと新しげに申し述るに及ばぬことなり

吾人々体の元を糺せば唯一個の細胞である、此細胞が一定の規則に據りて一個が二個に分れ其二個より四個の細胞か出來又此四個細胞十六個に增殖すと謂ふ様なる關係にて遂に千萬億兆無量の數に達し、以て吾人の身体髮膚を完成するに至るなり

是故に人若し人体の衛生を説かんと欲せば先づ第一に細胞の衛生より始めなければならぬ、近時或る生理學者は説を爲して謂へり曰く、細小動物体（一個の細胞より成立ち居るアメーバの如きもの）に就きて研究するにあらざれば眞の生理と謂ふとを十分に理解し能はぬ云々、斯の如き極端論者も

出た位であります、乍去細小肉片即ち細胞の生理的及病理的研究が甚だ必要であると謂ふ事は從來世界の輿論となり居つて容易に動かし得べきものではありません

各細胞の造搆に就きて其部分を區別すれば、皆樣御存知の如く通常細胞膜、細胞元質及細胞核(其内に核小体なるもの存す)等の如きものである、但し細胞にして此各成分を具有せざるものもあるけれど

斯の如き造搆を有する細胞の生活作用を熟々觀察するに次の三種あるなり

(第一) 維持、自養、榮養 (Nusrision)

(第二) 機動 (Eunr Sion)

(第三) 繁殖、增殖(Form asion)

今玆に委しく之を說明致しますれば細胞の生活機能は維持◎◎である、畢竟榮養の充滿して居る細胞でなければ應分の機動◎◎を營み得ず、夫の疾く走る、速かに動く等凡て是榮養の十分なる筋細胞の集合体筋肉が整々肅々として協力運動を爲すの外ならず。細胞の榮養が十分なる場合に於ては單ゝ自由なる機動を營み得るのみならず(前に申したる如く)次第に增殖◎◎し得るなり

此處に於て話が前に立還る、吾人々体は最初唯一個の細胞即ち卵細胞にてありしなり

一寸申上げ置きます、私は病理學に從事して居る者にて有之、多少人体各部、卵巢、子宮等に說き及ぼす樣に相成ます貴婦人方の御前にて之を口にするは甚だ恐縮の至とは存じながら學問上の事でありますから仕方なし請ふ幸に寛恕

此卵細胞は初め維持◎◎を專一として居れども一旦好

機會に遭遇すれば夫から忽ち増殖を始める（母体が若し不健康なれば其卵巢より化育し來る卵細胞の榮養も亦隨つて不充分なり、故に假令好機會に接するも成熟を遂け得ざるべし）〇是故に胎兒が子宮内に於て營む所ろのものは主として細胞の維持と増殖となり、但し胎兒の心臟と之に連繫する脉管等のみは（一定の時期より）始終其機働をも併せ營み居るなり

胎兒に榮養分を補給して細胞の増殖を助くるものは不問して知る胎盤なり

胎兒の胎盤と、之に對する母体の胎盤（子宮壁の一部分）とは實に極要なる塲處である、即ち此塲處に於て瓦斯其他の交換作用起る、尙ほ之を詳かに申せば、母体の血液は此塲處に於て酸素及滋養分を兒体の血液に分與し、又兒体の血液中に存する陳謝物（炭酸、剰餘なる水を、尿成分等）は凡て母体の血液に移り行き、是より母体の臟器を通りて外部に出るなり

斯の如くにして母体は胎兒の陳謝物を遠け且つ之に滋養分を給し以て十分の發育（細胞の維持及増殖を遂げしむ

然り、胎兒は母体の子宮壁に就きて滋養分を仰ぎ又不用物を排除す、然らば子宮壁（母体の胎盤は胎兒に對して肺臟腸胃腎臟等の如き緊要なる作用を營むものありと謂ふも決して不相應なる言ではない

可知子宮が若し或る疾患に罹るときは胎兒に如何なる影響を及ぼすかを

話が再度元に還る、胎兒が子宮内に於て營む所ろのものは專ら細胞の維持と増殖となり然るに一旦

母体を離るれば（出産を謂ふ）漸々多少の機働を營むとなれども、矢張維持と增殖とが小兒体の主なる生活作用である。此關係は小兒が年を取るに隨つて自然に變り來る、而して廿四五歲より後に至れば機働及維持の作用が主となりて、增殖は之に次く

右に申述たる如く細胞が、增殖するにも、又は機動を營むにも先つ第一番に維持即ち榮養を充分にして置かねばならぬ、加之吾人々体は時に或は病毒に接して之と戰かふと間々有之なり（疾病に罹るを謂ふ）其際細胞の維持不完全なる時は終に夫の病毒に打負けて仆れ死す、其證據と爲すべきものは枚擧に遑あらさるなり

故に吾人は平生良食を食して肉身の細胞を充分に貯ひ置くを要す、是則ち自衛の道なり又病毒に對する戰鬪準備なり、彼の一生惡食にも飽き得ずして唯々黃白にのみ汲々するか如きは衛生上必しも善きヿにはあらず、吾人は先つ細胞中に貯蓄すべきなり

所謂良食とはかの常人が貪る所ろの美食と異なり良食を食すると謂ふヿに就きて通常諸人が說く所ろの外特に次の注意を要す

（第一）斷へず食品を變換し咽口腸胃をして同臭味の食品に厭かしめさる事

（第二）善良なる食品おも幼、壯、老の時期に於て固より多少相異なるべき事

（第三）疾病の種類及各疾病の諸時期に於て最適當なる食品を擇ぶべき事

私は此（第一）と（第二）には就きて尙ほ一言を述る心算なりしが、餘り長くなりますから復た折かあ

りますなら何れ其時

（完）

衛生叢談

●哺乳兒の消化不良と牛乳との關係

一年以上の小兒を消化不良症と一年未滿の幼兒の同症とは自ら其有様を異にするものあり蓋し其原因に差あるを以てあり今記者の茲に言はんとするは幼兒の例とす

幼兒の此症に陷るや先つ乳汁を吐し食氣を減し精神不活潑となり啼泣し易く大便は綠色を呈し（普通なれば半熟の黄卵の如し）度數を增し便中に粘液を混じ）尤も吐出が甚しきときは便通は減ずるものなり）糞は酸性強く之れが腰部を潤ふして自然腰間に炎症を起すとあり發熱する場合と然らざるときとありて一定することなし時々眼球を回轉し或は手足をぴく／＼することあり此の如き現象が呈するときには多く胃に病疾の存するものと知るべし又腸の多く侵さるゝときには吐少なく下痢甚しく一日に十回乃至十五回甚しければ二十四回を超過することあるべし加之下腹痛の爲めに啼泣す

其原因と見倣すべきものは乳汁又は之れに關するものなり（例へは牛乳を容るゝ器等）母乳或は保乳に依て養なはるゝ幼兒なれば第一に其乳を與ふる人の健否を注意せざるべからず、之れ母の疾病感動、月經勞働并に營養不良が其原因となればなり此五原因の中一ッも母に非ざるときは其原因を小兒の方に考へざるべからず即ち月足らずして生

れたる幼兒は胃液の充分に分泌するを得ざるために消化不良を起す又貧血症の幼兒も胃の官能惡しき爲めに此症を發す又人工養育を行なふ幼兒に於ても亦然りとす

人の乳汁にて養なふを自然養育法と云ひ他の乳汁を以て養なふを人工養育法となす后者の材料には多く獸類即ち牛、馬、驢馬の乳汁を用ふ抑々乳汁の主成分は蛋白質、脂肪、糖分等よりなれ共獸類の乳汁を人の乳汁に比すれば其成分の分量幷に性質を異にす即ち獸乳には糖分少なく蛋白質の性狀異なれり又獸乳には種々の異物即ちバクテリア、糞、尿を混ず斯の如く乳汁成分の分量幷に性質の差異と混合物の存在することは幼兒に疾病を釀すべき誘因となるのみならず之れを過食せしむること幷に之れを容るゝ器物の不潔物幷に營養分少なき乳汁を與ふることが疾病を起すべき原因となるや必せり

營養分少なき牛乳とは第一牛の食物に關す即ち粗惡の食物を與へたる牛より乳を搾り之れに水を混じ又は之れに牛酪を取りたる乳汁を混じたる牛乳を云ふ之れ少しく搾りて多く賣るの目的に出づるものなり又新鮮なる牛乳中にも諸種の微菌の混ずることあるを以て宜しく之れを殺除せざるべからず其方法は單に牛乳を煮沸すれば可なりと雖も漸次之れを改良して今は器械を用ふるに至れり然れ共日常少量の牛乳を用ふるには敢て此器械を購求するの必要を見ず牛乳を「ソーダ」水にてよく洗ひたる瓶子に取り分け「ソーダ」水にて洗ひたる「コロップ」を以て栓となし鐵瓶中にて燗をなし之れを用ふれは足れりとす

「コンデンスミルク」は十六種ありと雖も其中米國製鷲印を最良となす（之れにも贋物あるを以て注意すべし）其色は雪白にして異臭なく湯に溶かしても固形物を見ざるを良とす其他諸種の粉末あり我邦に於ても乳の粉は古へより人の用ふる所のものあり歐州に於ては子ステル氏の小兒粉、リービヒ氏の豆粉等ありと雖とも悉く需用する價値なし

牛乳の成主を分析すれば次の如し

	人の乳汁	牛乳
蛋白質	百分ノ二	百分ノ四
脂肪	百分ノ三、五	百分ノ三、五乃至四
糖分	百分ノ四、八	百分ノ四
塩分	千分ノ一、七	千分ノ五

右の表を一見すれば同量の水を牛乳に加ふれば蛋白質の分量は人乳と同一になると雖とも脂肪幷に糖分の分量を減ず然れ共亦糖分は人爲的に之を加ふるをうれ共脂肪を加ふるとは今尚ほ研究中なりと云ふ斯の如く人爲的に研究して人の乳汁に似たるものを造り之れを與ふるも亦屢々消化不良を惹起するは別に其理由なかるべからず之れは人乳の蛋白質と牛乳の蛋白質とは多少其性狀を異にするを以て幼兒の胃之れに堪へずして不消化を起すに外ならざるなり母が重症を患ふる場合又は死去したる時には是非牛乳を與へざるべからず此時には牛乳の蛋白質に稀薄にせざるべからず其表は種々の學者の經驗に依ると雖とも次の表は我師弘田博士の採る所のものなれば茲に掲ぐ

	牛乳	水
生後三週迄	一分	三分

四週より八週迄	一分	二分
三ヶ月より五ヶ月まで	一分	一分
六ヶ月より七ヶ月まで	二分	二分

八ヶ月より稀釋するに及ばす尤も稀釋する際には必ず精製の乳糖を加へて甘味を附くることを要す

右の標準は眞に大体の分量にて必ず常に之れに依るに非ず甚た健康なる乳兒なれば既に六ヶ月頃より純粹の牛乳を與ふも可なり又孱弱なる幼兒に於ては六七ヶ月を經るも半分の水を加ふることあればなり故に良く反省して醫に議るべし

牛乳の蛋白質は胃液に逢へば豆腐の如く凝固し人乳の蛋白質は片々に凝固す此点より考ふるも人乳の消化は牛乳より良なりとす

比較的年老ひたる人の乳汁或は出産してより長時を經たる人の乳汁は小兒養育には不適當なり其他羸弱なる婦人又は神經質の女子の乳汁は其分量上に増減甚しければ用ふるなかれ

牛乳を與ふるには少なくとも二時間を經ざるべからず此事は嚴守すべし而して二三週の幼兒には三時間毎に授乳するを良とす又一回の量を定むるは甚だ困難なれ共約一二週の幼兒には一回分にて稀釋したる牛乳五十「グラム」六十日より百日の幼兒には百「グラム」三四ヶ月の小兒には百五十乃至二百「グラム」を與ふるべし

◎二三の食物

○豆腐糟

豆腐糟は生豆腐を絞りたる糟粕にして之れを顯微鏡にて撿すれば六角の細胞にして其中に全形を保つものを見るとあり又時によりて絲状の細菌を混

するとあり之は濕氣を帶びたる豆腐糟を貯へ置くの際に發生したるものなり豆腐糟を水にて煮之を漉して其稠厚なる汁を取り檢査するに既に復た澱粉を見ることなく其他糖分もなし是に由て之を觀れば豆腐糟は不潔の植物纖維素塊にして滋養分を含むと極めて寡なく家畜の飼料となすには可なるべしと雖も人の食物となすべきものにあらず

○氷豆腐

之を又高野豆腐と稱へ冬時生豆腐を寒氣に觸れしめ其質稍や硬固となるを待ちて強く之を壓搾して其水分を去り乾したるものにして歐州に於て冬時用ひらるゝ牛酪を固むるも亦此法に因るなり故に其性分も亦牛酪の極めて乾固したるものに比すべし故に庖厨の用に供する固より可なり但し其消化しかたきを以て生豆腐に比すれば大に劣れるものとす

○海艸

海艸は隨分滋養分に富みたる食物にして少しく調理を加ふれは其味甚た美なるものなり某ドクトルの分析に依れば適宜に乾かしたる海草は百分中十八より二十六分の水を含み九より十五分の窒素を有し澱粉質及ひ糖分は大抵平均して六十六分を含む是に由て之を觀れは海艸は植物性養物中最も高等の地位に算入すべし實に蕎麥、玉蜀黍等よりは滋養性分に富めるものとす然れとも海艸中には往々消化し難くして下痢を發し易きものあり故に只其含窒素物の量のみに拘泥して多食すべからず須らく種類を撰み調理に注意し適宜に之を用ふべし

左に二三の成分を示さん

淺艸海苔は其上等品に於て含窒素物（身体の養ひ

になるもの）を百分中廿六分を含み纖維（不消化のもの）は僅かに六分位なり

羊栖菜（豆州產）は百分中八分位の含窒素物にして纖維は十七分程を含む故に營養分尠なく不消化分割合に多し

昆布（北海道產）は其百分中含窒素物八分にして纖維は九分位なり

黑菜は百分中九分の含窒素物を含み七分の纖維を含む

裙帶菜は百分中八分の含窒素物を有し二分の纖維を有す

石花菜は百分中十分は含窒素物にして十四分は纖維なり

瓊脂は百分中十二分の含窒素分を含み纖維は殆んど含まず

上記の含窒素物及び纖維の外に水分、灰分、無窒素物等は種々の分量に含有すると雖とも是等は茲に掲ぐるの要なし

歐州に於ては海艸の僞製又は着色料等に就て衛生上の監督を要すること稀なれ共我國に於ては從來昆布の着色に銅緑或は銅鍋を用ひて之を煮る等のことあり爲めに銅の中毒を人身に及ぼすと雖とも其着色料に用ふる所の量僅少にして直ちに中毒せさるが故に之を意とせさる人亦少なからず或は其着色なるを知らずして昆布本分の色質なりと妄信する人なしとせず此着色は縱令ひ直ちに危害なきも知らず識らず健康に害あるは論を容れざる所なり殊に銅緑に硫砒石を混ずるもの多ければ右等の昆布は決して食用にすべからず

○鳥肉と兎肉

鳥肉と兎肉は含窒素物極めて多量にして脂肪分甚た乏し故に含炭素物を混用するに非されば以て十分の營養物となすべからす尤も鵞、鴨或は家鴨等の如き水禽に於ては脂肪稍や多しと雖とも消化し易からさる一種の香味ある物質を保てり通常鳥の血液は他の赤血動物の血液とは相異なりて血液に赤色を與ふる所の鐵塩は百分中僅かに二、一一を有するのみ牛羊の肉に於ては二四若くは二五を保有す故に水禽の肉は牛羊の肉よりは下等なるか如しと雖とも亦牛羊に優れる一種の性分あり即ち神經系統の疲勞を補給するの力を有する燐酸塩を含有すること牛羊に比すれば頗る多量あり

總て鳥類兎類共に野生のものは味美にして且滋養分に富むもの多しと雖とも之を畜養したるものに比すれば消化易からざるもの多し

○魚肉

魚肉の滋養食物たる亦言を俟たすと雖とも魚類のみを以て滋養を資んと欲するときは疾病を醸すものなれば必す他の食物と併食せざるべからず又其滋養の厚薄を述んに之に牛乳、鶏卵等を併せ食する者と雖とも獣肉、鳥肉を以て常食とする人の健強なるに如ず故に之を獣肉、鳥肉とを比すれば其劣れるを知るべし然れとも亦魚肉に於ては一の利益あり即ち其性分中燐酸塩類を含むこと鳥獣諸肉より最も多量なるか故に脳力を使役する職業の者或は憂苦脳を悩ましむる性ある人は常に之を食するを良とす

魚類中鱈及ひ比目魚は百分中固形物の量二十二分を保ち其十八分は含窒素物の量とす故に其營養の價格を増すには必すボートル(砂糖の類)等の含炭

素物を要すべし鯖、鰻、鮭及ひ鱒は稍脂肪分に富みて百分中六乃至七分を保ち就中鰻は十四分を保つものなり青魚、鰮等も之れに同し又淡水中の魚類殊に八ッ目鰻も亦同様のものなり
總て魚類は其白子及ひ鰤の熟したる時節は其肉堅實にして脂肪分に富み之れを調理する時は其香味他の時節よりも頗る優れるものあり之れに反して他の時に於ては其肉質柔軟にして稍や膠樣狀を呈し且水分多きものとす淡水の魚は之を海魚に比すれば其香味稍や劣れるものなり故に調理の間最も種々の稠和を要すべし歐州昔時に於ては淡水の魚を煮るには專ら酒類を用ひ且牛乳等にて製したる掛汁を以て食するの習慣たりしが今時にありては多くは燒て食するを常とす

●尿に就き

尿は腎臟より分泌致しまする眞の排泄物にて既に他の効用はなく眞に体外に打捨てらるゝものであります其化學的成分は種々の動物にて一樣でありませず一動物にても身体一般の狀態と榮養の異なるとによりまして全一ではありませぬ其成分は體質の分解によりて生じたる數多の物質と体の榮養に與せざる所の外來の異動（藥物等）とより成るものでありまます
皆樣御承知の通り健康なる人の新泄の尿は澄みて琥珀色の液でありまして一種の臭氣を有し其味は苦鹹く酸性を有しております之れを靜かに置きますると細かき雲脚を生じます
尿の成分中其主なるものは尿素と申しまする結晶致しまする物質でありまして之は體中に於て蛋白質及び蛋白樣質の分解によりて生じまするもので

わりますから蛋白質及ひ膠質等の如き窒素に富みますする食物を食しますると尿素の量も增します然し其增し方は一定の度に達しますれば最早夫れよりは增しませぬ又澱粉質、脂肪質及肉類を混食致しますれば單に肉食をなすものより少量の尿素を排泄致すものであります

人の二十四時間中に排除致しまする尿素の量は三十五「グラム」を常とします然しながら次の件々に從て多少異動が起ります

男女及年齡に從ひまして尿素の量に差を生じます女子と小兒は男子に比へますれば少量の尿素を排泄します之れに反して孩兒は大人に比べますれば比較上多量の尿素を排除致します

尿量が增しますれば之れに隨て尿素の全量が增加致します

時間に由て增減があります早朝より午前十一時までは減じ之れより漸々增し午后五時に至て極度に達し之れより又た漸々減少致します

身体の動靜にも關係致すと古へは申しました即ち筋肉を使用致しますれば尿素の量が增加するものと信じて居りました然しながら實地に之れを撿しまするに身體の勞動(假へは高山に登る等)に由りて著しく尿素の增量は致さぬと申すとであります

終りに滋養は最も尿素の增減に關するものでありまして肉食は之を增し蔬食は之を減じ動物に全く食物を與へませねば漸々尿素の量を減少致します然しながら一定時を經ますれば全く減少しませぬ點に達し只少量の尿素を排泄して死するまで變りませぬ之は飢へたる動物は自から身体の運動をな

しませぬ故に體質の燃燒も減少致しますれとも心臟の運動呼吸等は生命を保續するに欠くべからざる者でありますから之れを營みまするには多少體質を消耗せねばなりませぬ之れで死に至るまで尿素排泄の止まさるわけでありがます其他成分として尿酸、グリコーール、色素、食鹽、燐酸酵素等諸種の物質を含みおりますが是等は玆に畧しれきます

人若し腎臟病脚氣等の如き疾病に罹りまずると尿に變化を起しますから二三の病的の尿に就き御話しを致ソート思ひます

蛋白尿と申しまするは尿中に蛋白質の存するものを申します健康なる人體でも時によりますれば極少量の蛋白質を尿中に含むとがありますが之は別に害を起すとはありませぬ之れに反して腎臟病の爲めに蛋白尿とありますものは一の疾病でありますす又血液循環の障害によりまして蛋白尿をあすとがあります又熱がつゝく間に蛋白尿を起します又細菌が腎臟を刺戟致まして蛋白尿をあし又貧血症にて血液の成分に變化を起し蛋白尿を發し又腎臟に疾病なくして尿道等の疾病のために蛋白尿をあすとがあります

糖尿とは尿中に糖分が排泄せらるゝ疾病でありまして其分量は極めて少々でありまず其中移行性糖尿と申してコレラ、腦病、肺、心、肝臟病のときに不意に見るとがありますが之れは稀れでありまして又或る中毒のときにも糖尿を起すとがありますす之は大したる害はありませず其原病の存否にかゝはらず自然治するものでありまず之れに反しまして蜜尿病と申しまするものは一個獨立の疾病で

ありまして此際には尿量が増し色は薄くなり糖分は繼續して尿中に排泄せらるゝものでありまず

其他纖維素尿、血尿、血色素尿、脂肪尿、ムチン尿、乳糜尿、膽汁尿等と申して身体の諸成分が尿中に排除せられます疾病が有りますが其中蛋白尿と蜜尿が一番よくあることで且つ必要であります又其外諸種の固形物が尿中に混し來ることがありますが是等は醫家でなければ知るに及びませぬ

斯の如く尿にはいろ〳〵の變化を起しますのでありますから平常身体に異狀がありませぬ時は別に氣がつきませぬが若し少しく平常と變りたる時には尿が通常より多量に出るとか又は度數を増したりとかを各自注意して診察の際醫師に報告すると醫師の參考になることが屢々あります

◎漬物こしらへかた

日本人は古來の習慣にて多く漬物を賞用するものにして貴賤共一日も欠くべからざるものなり如何に美味なる料理ありとも此一品なかりせば物たらぬ心地するもの故に常に心掛け四季共に蓄へ置くべきものなり尤も漬物の多くは滋養食物の價値は寡なく單に嗜好物となり他の食物を取りたる時の副食物なれば之れのみにて生活を保たんとするものにあらず其漬方には國々により異なれども大抵大同小異なり又貢物になすと家々に蓄るとは各々差別あれとも先つ鹽の加減にて味ひ異なるものなれば其分量に最も注意すべきなり又味ひ加減もあり澤庵漬の如きは月々或は年度に從ひ鹽糠等に分量あり漬物はなるべく日蔭の冷しき所に置くを肝要とせり物品により重量の强くするものあり又あ

まり強くするときは反て惡きものあり又粕漬其他香氣を要するものは皆蓋へ目貼をなし空氣の入らぬ樣にすべし今諸種の漬方を次に述べん

一 塩漬

塩漬は塩のみを振かけて漬けるものを云ふ塩漬の中菜の類へ初より終りまで壓しをあまり強くするは惡し初め漬込し際充分壓して塩水の上りたるときは前の壓石を取り適度に石を替ゆべし

一 粕漬

之は酒の搾り粕にて漬けるなり今漬る所の品物により種々あれども余り堅りたる粕は酒を少し掛け煉りて漬るもよし瓶或は桶へ粕を敷き之れの上に品物を並べ又其上に粕を塗り付け又品物を並べ右の如くなし蓋を置き能く目貼をなすべし

一 芥子漬

之は芥子の粉にて漬込むなり其品物により種々の仕方あれども先づ芥子の粉を美淋にて解き粕漬の如き仕方にて漬けるあり其他芥子漬には多く麹を加へ漬たるも亦芥子漬と云ふ麹を加へ漬るときは芥子の粉と麹を能く混合し品物へふりかけながら漬込むなり和したる麹を能く幾重にもふりかけ一々美淋なり又酢を共にふり掛ける仕方もあり一回塩漬となしたるものを漬けるには別に塩を加へざるも生ものを漬るには芥子の粉と麹と合する際塩を適宜に加ふべし其分量等は品物により異なれば一々茲に詳記すること複雜なれば畧す

一 味噌漬

味噌漬は赤味噌の中へ入れて能く抑へ置くのみ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

又大根、牛房、瓜の類は赤味噌を炊き込むとき共に入るなり味噌のなるゝに従ひ自然味噌汁しみ込み漬るものなり

一梅酢漬

之は梅酢を以て諸種のものを漬るなり梅酢とは梅を漬け上たる汁なり梅酢は硝子瓶に入れ能く栓をなし置く時は何年を經るも腐敗することなし生大根などを薄く切り梅酢の中へ浸し置けば二三時間にして食しうるなり其他蕪菁、新生姜等を生のまゝ浸し漬となすべし

一糠漬

之は澤庵漬を云ふ糠と鹽を和合し漬け込むなり糠と鹽との分量は品物により異なるも今一夜漬の如きは大抵糠壹升の所へ塩一合の割合なり

一印籠漬

之は瓜、茄子等の中へ種々のもの入れ漬け込みたるものなり先づ瓜の先後を切り中實をくりぬき其中へ蓼又は紫蘇の葉、生姜、青蕃椒等を押入れ甘塩加減にして壓を強くするなり六七日たてば喰ひ加減となるべし

一糠味噌漬

之は醶醨漬とも云ふ小米をふるひたる糠一斗に塩五升斗り和合するなり塩五升へ水五升を入れ沸し立て又一夜さましおくべし後ち糠とねり合し適宜の桶樽へ漬るなり又糠炒鍋にて煎り塩水と和合する方よろし新に造りたるときは澤庵漬の大根を四五本糠の付きたるまゝ漬込み置くべし毎日品物を漬込むときは能く底まで掻廻し其度毎に塩を少しつゝふり込むべし糠味噌へは酒の燗さまし醬油のおり又粕漬の粕の殘りものな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ぞ凡て捨るものを入るれば反て味を美にするものなり又蕃椒を五六本も入れ置けば虫の生ずることなしと云ふ

一奈良漬

白瓜を二割となし中實を去り鹽を詰め天日に二三時間乾すべしそれより鹽水をこぼし又粕に鹽を合し置き瓜を並べて粕をつめ瓜と瓜と當らぬ樣になし押し漬にすべし漬込に後大凡三ヶ年を適度となす又漬桶の底を二重になし下へ糠を入れ水氣を落す樣にせざれば糠を變ることあり凡て瓜類を粕漬となすときは右の如き漬桶を用ふべし

一あさ漬

大根を生のまゝ酒樽のあきたてへ漬るなり大根五十本に花麹一枚半鹽一舛の割合なり麹と鹽と能く交せ合せ一段つゝ振り掛け其間毎に新藁を一本位に並べ敷くべし右の如く漬け終りたるときは上に鹽を二三合程振り掛け押蓋をして強く壓し置くべし自然に水あがりて凡二十日間位にて漬かるなり此漬物は長く置時は酸味の生ずるものなれば速に食すべし

一菜漬

菜を能く洗ひかぶを切り庖丁目をいれて漬るなり早く食すると又長く置くとによりて鹽加減あれども四斗樽へ漬込み鹽凡そ七八合位にて漬置く時は永く置くも支へなし押は最初水の上るまでは強く押し自然押をゆるめざれば菜をこはくし且菜の色赤く變ずるものなり

◎濕疹

此病は人體の皮膚に來りまして小兒や榮養の惡し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

き人に屢々見る所のものでありまして俗に云ひまするといろ／＼の名を付けます例へば小兒の頭や顔又は手足に生じまするを體毒と云ひ又くさなど稱へますし大人の脛に冬時之を生じまするとかん瘡と申します之は至つてしつこき病でありてなか／＼治り惡きものであります

總て皮膚が外來の刺戟をうけまするを生じ易くあります尤も刺戟の強弱及ひ其長短又各人皮膚知覺の鋭鈍によりまして幾分か異なる者で有ます

始め皮膚に刺戟がありますると其處が赤く斑になり多少濕くありて痒覺を感じ少しく高くなりまして疹となります夫れより其中に液を含む樣になりまして小なる水疱となりまして之が永くありますると膿をもちまして膿疱となりますそれより膿疱が破れまして液を洩らし一部は乾きまして痂となり其色は液の質によりまして褐色や黒色となります但し水疱をなさずして常に濕ひて液をだく／＼出すものや乾きて皮膚の剝脫をなすもの等いろいろの變化を起すこともあります

此濕疹には急性と申し速かに激しく生ずるものと慢性と云ひて緩慢に永く繼續してゐる二通りありまして從て其症狀に多少相違はありますが判然したる境界はありませぬ

◉大日本婦人衛生會景況

◉一月例會　一月十五日第三土曜午后一時より麴町區九段坂上偕行社樓上に於て新年發會を開きたり此日や幸に天氣淸朗なりしをもて正午頃より陸續參會するもの多く一時頃に至りては會員及傍聽者の數を合せて無慮五百五十餘名に達しさしもに廣き講堂も立錐の地なきに至りたり席定まるや宮本仲君醫學士山根正次君醫學博士片

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

山國嘉君(精神病者の取扱ひに就て)演説及事務員の報告等あり終りて福引の餘興を催せしが此方法たる魚釣に傚らへ釣竿にて福引を釣り上げしを以て興も又甚だ多かりしが散會を告けしは四時頃にして非常なる盛會なりき

◉本會は去二十七八年の戰役の際會員擧つて軍用品獻納の爲め舊賞勳局より銀杯及賞狀を下附せられたり今左に其全文を掲けて御報告申上候

日本婦人衛生會

明治二十七八年戰役ノ際報國ノ旨意ヲ以テ軍用品獻納候段奇特ニ候條爲其賞銀杯壹個下賜候事

明治三十年六月一日

賞勳局總裁
正三位勳一等子爵大給恒 印

廣告

◉新年發會の節餘興費として寄附せられたる人名及金額左の如し其の收支決算は次號に讓る

一金壹圓	會長 子爵夫人	仁禮すか子
一仝	副會長	濱尾作子
一仝	幹事	鳩山春子
一仝	仝	高木鎌子
一仝	仝	宮下咲子
一仝	仝	三浦敎子
一仝	仝	北澤信子
一仝	仝	穗積歌子
一仝	仝	松平芳子
一仝	評議員 男爵夫人	岩崎早苗子
一仝	仝	西升子
一仝	仝 男爵夫人	西靜子
一仝	仝	緒方悅子
一仝	仝 男爵夫人	南部くま子
一仝	仝	濱田捨子
一仝	仝	中濱芳子
一仝	仝	丹波貞子
一仝	仝	岡田德子
一仝	仝	中橋悅子
一仝	仝	宮本樂子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

廣告

一金壹圓　評議員　加藤鈴子
一仝　仝　加藤常子
一仝　幹事　羽田三緒子
一仝　仝　木內磯路子
一仝　仝　三井晴子
一仝　仝　坪井國子
一仝　仝　子爵夫人　田中いよ子
一仝　仝　齋藤恭子

◎新潟支會々員勝間田千代子は是迄特別會員の處本月より終身會員となられたり

◎中村きん子是迄通常會員の處本月より特別會員となられたり

◎入會者

◎會員玉生くに子の紹介により
本郷春木町三丁目五十六番地　伊東まさ子

◎會員大久保晃子の紹介により
本郷六丁目十番地順天堂病院內　秋山とよ子

◎會員渡邊なつ子の紹介に依り
北海道會所町五十番地　太田ゑみ子

本郷六丁目十番地順天堂病院內　加藤もよ子

◎會員冲ゑい子の紹介により
群馬縣群馬郡葺輪村大字西明屋村百五十五番地　田中のぶ子

◎新潟支會へ申込に依り
新潟縣新潟市上旭町　特別會員　石黒ゑゐ子
仝　西堀通四番町　石井しま子
仝　西堀通一番町　石高いし子
仝　西大畑通　吉井とら子
仝　寄居町　佐藤せき子
仝　上旭町　石山とみ子
新潟縣新潟市　終身會員　八木松代子
仝　寄居町　中原てい子
仝　中村いよ子
仝　樋口いく子
仝　古町五番戸　山崎いき子
仝　學校町二番町　内田きし子
仝　内田恭子
仝　西大畑通　吉井とら子
仝　古町六番町　會津やす子
仝　古町七番町　大井榮野子
仝　東仲通　多田わい子

仝　東仲通石黑方　小泉ちゑ子
仝　上旭町　小島こま子
仝　西堀前通七番町　齋藤玉子
仝　醫學町　八百枝てい子
仝　本町通五番町　大塚ます子
仝　高橋産科院方　磯邊よし子
仝　羽田かね子

◎會員春日井清子の紹介により
神田錦町三丁目十七番地　高木桑子

◎會員増田せい子の紹介により
赤坂區新坂町八十二番地　三浦銈子

◎會員工藤花子の紹介により
大坂南區千年町番外二番屋敷　松谷わい子

◎會員矢田彌壽子の紹介により
下澁谷日本赤十字社病院　井上まつ子

◎會員俊野いわ子の紹介により
芝榮町十三番地久松邸内　管豊子

◎事務所へ申込により
赤坂區福吉町一番地　土屋六子
赤坂區福吉町一番地　浦野まつ子
日本赤十字社病院　高塚せつ子
日本赤十字社病院　桂幾代子
日本赤十字社病院　石川たき子
日本赤十字社病院　井上松枝子
福岡縣筑後國三池郡大年田町大字下里
三池集治監官舍　士族　武田政子

◎賛成員山根正次君の紹介により
東京赤十字社病院　杉山嘉年子

◎會長仁禮すか子の紹介により
赤坂青山南町二丁目六十一番地　志岐ひさ子

◎會員藪谷保子の紹介により
京橋銀座二丁目十三番地　岸田駒子

◎評議員宮本樂子の紹介により
京橋新富町五丁目八番地　高岡波子

◎轉居者

麴町永田町二丁目二十八番地　河野せき子
本郷弓町一丁目二十六番地荻原方　田中たか子
淺草田町一丁目八番地　栗田福子
小石川原町百二十五番地　岩橋とき子
麴町霞關海軍省官舍　加藤展子
麴町元園町一丁目三十九番地　早川春子
四ツ谷塩町一丁目二十二番地　俊野いわ子
日本橋濱町二丁目九番地大井田方　塙とせ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

牛込佐内坂町三十一番地 林竹子
大坂西區立賣堀北通六丁目 岡田みす子
淺草小島町四十八番地 岸美代子
小石川金富町三十三番地 濱尾作子
小石川諏訪町二十九番地 鳩山春子
神田駿河臺東紅梅町 高橋せい子
麴町飯田町六丁目十六番地西尾きやう子方 口羽いま子

恭賀新年
川上雅量

謹賀新年
日本橋本町二丁目十二番地
明治三十一年一月一日 高橋孝子

謹賀新年
明治三十一年一月一日
日本橋濱町二丁目九番地
塙とせ子

恭賀新年
明治三十一年一月一日
京都
佐伯理一郎

新年の壽義千世かけて限りなふ目出度祝納まいらせ候かしこ
明治三十一年一月二日
大坂西區立賣堀北通
岡田みす子

恭賀新年
謹而謝舊來厚誼
伏而祈高堂萬福
明治三十一年一月一日
秋田縣仙北郡生保内村
伊藤てつ子

私立大日本婦人衛生會規則

第一條　凡本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持するの方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置く

第三條　本會の會員たらんと欲する者は身分の尊卑を問はず何人にても入會することを得

第四條　會員たらんと欲する者は族籍住所姓名を記し本會事務所へ申込あるべし

但事務所は下谷區練塀町四十三番地に置く

第五條　本會々員を分て修身會員特別會員通常會員の三類とし共に會費金を納むる者とす

但終身會員は一時に金拾圓以上を納め特別會員は一年金二圓四拾錢以上を納め通常會員は同金壹圓二拾錢を納むる者とす尤も會員中書生及其他事故ある者は雜誌料として同六拾錢を納めしむ

第六條　男子にして本會の主義を賛成する者は之を賛成員とす尤も會費は本會員に同し

但本會に功勞ある者は役員の協議を以て終身賛成會員（無會費）とすることある可し

第七條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉す推戴員は皇族の御息所等に之を申請するものとす

第八條　本會は左の役員を置く　會長一名　副會長一名　幹事七名　評議員二十名　書記若干名

第九條　會長副會長及幹事評議員は會員の投票を以て之を撰擧し書記は幹事の推撰により會長之を命ず

但書記は都合により會員外の婦人又は男子に托することあるべし

第十條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し又は其代理をなし幹事は會長の命を受けて會務を處理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命に從て諸記錄及雜務を掌る

但幹事の分課を設けて第一　會計　第二　編輯出版　第三　庶務とす

第十一條　會長の見込を以て右役員外に會員中より臨時に指名委員を置くことあるべし

第十二條　會長副會長及幹事評議員の任期は一年とす尤も再撰するも妨なし

第十三條　會長副會長及幹事評議員は無給料とし書記は相當の報酬を給す

第十四條　本會の集會は七月八月を除くの外每月一回として通常第一土曜日午後一時より之を開く

第十五條　每會學識經驗ある者を聘し講義演說を囑し本會々員の演說と共に之を筆記して本會雜誌に掲載し每月各一冊つゝ無代價にて之を會員に頒付するものとす

但し演說の間に談話を交ゆる事あるべし

第十六條　會員は家族の婦女子又は知己の婦人を本會々場に誘致して傍聽せしむることを得

第十七條　本會々講義演說の際男子の傍聽を禁ず

但し會員に緣故ある男子は此限にあらず

第十八條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明治二十一年二月二十八日内務省許可

第十九條　但些少の金額は日々の費用支出の爲め事務所に引出置を得　會計の收支は總て會計課幹事の捡印を要す

第二十條　會員又は會員外より金圓若くは書籍物品等を寄贈あるときは本會より謝狀を送り且寄贈の品目及其人の姓名を本會雜誌に載せ報告するものとす

第廿一條　會費は郵便小爲替にて東京下谷郵便局へ向け振出しある可し

但不得止塲合には郵便劵を代用するも妨けなし尤も一割增とす

第廿二條　入會員には會員證を附與すべきに付郵便にて申込の者は郵便劵二錢を添ふべし

第廿三條　每年三月九月の總會に於て會計の收支庶務の概略幷に會員の增減等を報告す可し且規則改正の案あれは之を議定するものとす尤も議定は總て多數決とし可否半數なるときは會長之を決す

但至急規則の改正を要する事あるときは豫め會員に報して臨時に之を爲すとを得

第廿四條　三月の總會に於て役員の撰擧をなすものとす

第廿五條　規則の範圍內に於て役員の評議を以て細則を設くることを得

第廿六條　各地方にて發起者十人以上ある者は支會を設くることを得

但其規則は本會の規則に抵觸せざる樣起草し本會役員の認可を經へし

第廿七條　本會の集會塲は時々報知する者とす

歯科診察　午前八時より午後五時まで

東京日本橋本町二丁目十二番地

歯科醫　高橋コウ

看護婦生徒（自費・貸費）ヲ募集ス

麻布區箪笥町六十四番地

十字看護婦會

明治三十一年一月

明治三十一年一月十八日印刷
明治三十一年一月二十日發行

發行所　東京下谷區練塀町四十三番地　大日本私立婦人衛生會

編輯兼發行者　東京牛込區矢來町三番地　田中德三郎

印刷者　同　神田區小柳町十三番地　小高良造

印刷所　同　神田旅籠町貳丁目拾一番地　廣業館

明治廿六年四月四日遞信省認可每月二十日發行

（定價金拾錢）